

博 士 論 文 要 旨

看護学専攻 基礎看護学教育研究領域	氏 名 坂井 謙次
論文題目	基礎看護学実習における実習指導の自己評価の構造
Key words : 実習指導、自己評価、基礎看護学実習、立場の変換 本研究の目的は、実習指導の自己評価の構造を明らかにすることである。 筆者の先行研究と第一段階の研究で明らかにしたく実習指導を自己評価するための指針を念頭に基礎看護学実習に臨んだ教員5名へのインタビューと筆者自身のフィールドノートから、指導場面を対象－認識－表現の過程的構造に沿って再構成した。28の指導場面の教員の認識と言動に着目し指導の自己評価の特徴を捉え、指導場面の評価との連関から実習指導の自己評価の構造を抽出した。「実習指導の自己評価」の概念規定に照らし、全体の共通性と相異性を検討し、以下のように基礎看護学実習における実習指導の自己評価の構造が明らかとなった。 「自己評価のはじまり・きっかけ」の段階では【患者のケアの責任 安全・安楽・自立への脅かしへの気づき】【学生の感情の揺れ】など7つのきっかけとなる状況が確認できた。これらは[患者の言動・状況の変化への気づき][学生の患者の言動・状況の変化への気づき][病棟スタッフの言動・状況の変化への気づき]として集約できた。この段階では、患者や学生の言動や状況を教員の看護観や教育観に照らして反映し、感情が揺さぶられ現象への問いかけが起こり、さらに何故そのような状況が生じたのかと問いかけが起こっていた。 「自己評価の着眼点の明確化」の段階では、【学生の立場の変換】【看護者としての責任と自身の看護実践能力】【指導の結果としての学生の反応】など7つの着眼点が見られ、これらは[学生の看護実践能力の修得段階の特徴に着目][教員の看護者としての判断・実践能力の特徴に着目][教員の指導の特徴に着目]と集約できた。この段階では、指導過程のどこに指導上の課題があったのかと客観的な分析がはじまり、指導過程における患者及び学生の実態を想起して問題発生状況とのつながりを見出し、指導上の問題を明確にしていた。 「指導の方向性の修正」の段階では、【看護の専門知識として身につくように】【具体的なケアにつながるように】【学生の実践能力を評価】など11の指導の方向性が見られ、これらは[学生の未熟な部分が改善できるように][患者のケアにつながるように][学生の実力を確認・信じるように]という方向での指導の修正が行われていた。この段階では、明確にした指導上の問題をもとに、患者の状態が好転し、かつ、学生の看護実践能力が向上した状況を予測し、どのような指導の方向性に関わることができればそれらの良い変化を期待できるかと、指導の方向性を修正していた。 「指導の結果の意味づけ」の段階では、【迷いのないケア】【患者の認識を予想し関わることで看護を継続できた】など8つの意味づけが確認できた。これらは、学生のケアの[患者にとっての意味を確認する][学生にとっての意味を確認する]ことにより指導の結果を意味づけていた。この段階では、指導の結果として表れた患者及び学生の変化を確認し、教員の看護観と教育観に照らして意味づけていた。 教員は看護者と教員の立場を常に自在に行き来し、状況によっては自己評価を辿り直すことで振り返るべき指導を焦点化していた。そして、教員と学生の自己評価が相互に働き合うことで学生の看護実践が変化・発展し患者へのより良い看護過程が進んでいることが確認できた。 指導の自己評価の構造に照らして自己評価がどのように進んでいるか確認しつつ、指針を意識的に適用し自己評価を積み重ねていくことが、実習指導能力の向上のために不可欠であるという示唆を得た。	

指導教員氏名（自署）： 山 岸 仁 美

R5年2月9日

宮崎県立看護大学大学院

研究科長 田中 美智子 様

学位論文(博士) 審査委員

氏名(自署) 山岸 仁美

氏名(自署) 小野美奈子

氏名(自署) 田中美智子

氏名(自署) 河部 孝子

学位論文審査及び最終試験の結果報告書

このたび、審査委員会として、学位論文(博士)の審査及び最終試験を終了したので、その結果について下記のとおり報告します。

記

学生氏名 坂井 謙次			学籍番号	
看護学専攻 基礎看護学教育研究領域			指導教員氏名 山岸 仁美	
成績 評価	学位 論文	合格	最終 試験	合格
論文 題目	基礎看護学実習における実習指導の自己評価の構造			
審査 要 旨	本研究は、基礎看護学実習において、教員がどのように自己の指導を自己評価しつつ学生に指導をしているか、実習指導の自己評価の構造を明らかにすることを目的としている。 第一段階の研究では、先行研究において抽出した実習指導を自己評価するための指針について、有用性の検討を行った。次に、第二段階の研究で、実習指導教員5名に、有用性が確認できた指針を活用し実習指導を依頼、自己評価しつつかわったことで学生の関わりが患者にとって看護になったと思われる指導場面の判断過程を半構造化面接で詳細に聞き取りデータとした。再構成した28場面を分析対象として、各指導場面の自己評価の特徴を抽出し、それらの共通性から実習指導の自己評価の構造を明らかにしていった。 審査では、前審査での課題であった、研究目的を定めるまでの吟味の内容の論述および、第一段階と第二段階の研究の位置づけ、構造化の抽出過程の論述において、より明確に表現されていると評価された。また、考察をさらに深めるとともに、本研究の意義を明確に論述するよう助言された。論理的な記述という点では、より表現を精選することを指摘され、発表会では、研究過程を端的にまとめ発表することができた。 教育の対象となる学生及び看護の対象となる患者、両者に良い変化を創り出す実習指導の中に存在している多様で複雑な実習指導の自己評価の構造を抽出できたことは、看護学教育の要となる実習指導の質を上げるために、意義ある研究であり、独自性のあるものとして認められた。			